

2019年度 前期授業評価アンケート 顕彰科目担当教員コメント t

教員名	島田浩之
顕彰科目名	手話講座2
<p>●授業運営において工夫されている点</p> <p>1. 『『まずやってみる』の精神で能動的な授業を展開する』・・・私は他大学では言語学の講師として音声言語[外国語]の授業を担当しています。音声言語としての外国語学習の基本は、「文の復唱⇒音読⇒暗唱」の過程を繰り返すことです。このようなプロセスは視覚的な言語である手話の学習にも応用できます。というのは手話の習得には「まず真似をする」(≒復唱・音読に相当)ことが重要だからです。手話の初修受講者がほとんどの今年度のクラスでは、最初は屈辱抜きに私が示した手話表現の真似をすることから実践しています。真似をすることで覚えた表現は、次の段階では自分のことを語る「1人称」の文として変換することで実用的な段階に高め、最後に受講生同士が交わるようなゲームを通して、状況に応じて手話表現を使うことができるような応用力を試す学習環境を整えています。</p> <p>2. 「言語学の知見を取り入れた授業を実践する」・・・手話は「言語」です。自然言語としての手話を習得するにあたり、(言語学の専門的知識や専門用語は受講生には伝えませんが)言語学の知見を学習課題の中にそれとなく織り交ぜて、科学的根拠に基づいた授業を実践しています。音声言語では言語の意味の違いを表す最小の単位として「音素」という単位があるのですが、手話にも「音韻論」という研究分野が存在します。手話の「音素」に相当するのが、「手の形・手の位置・手の動き(の向き)」の3要素です。これらの3要素は「真似をする」過程で非常に重要で、手の形や手を置く位置は初修学習者でも比較的真似しやすいのですが、(教員と受講生とが体面式で授業を行う授業形態では)動きの向きを正確に再現することは案外難しいようです。そのため必要に応じて学生の座席まで行き、学生から見た向きで手話表現を示すなど、個別指導にも力を入れています。</p> <p>3. 「楽しい授業を実践する」・・・言語を学ぶことは人間関係が広がることに繋がり、楽しいことです。手話を通して自分の将来の可能性が広がることを期待し、「手話を学ぶことは楽しいことだ」と受講生に実感してもらえるように授業の企画を考えています。座学の時間ばかりにならないよう、受講生全員が交流できるよう、(私が独自に考案した)手話を使った様々なゲームを取り入れています。</p> <p>●今後取り組んでいこうと考えておられることなど</p> <p>1. 前期は文単位の手話表現の習得に努めました。後期はそれらの知識を応用し、比較的長い文章のレベルで自分のことを語るができるよう、「スピーチ力」を高める授業を実践します。受講生各人が伝えたい内容を日本語文章にし、それを手話に翻訳するという作業を行います。「翻訳する」ということは異言語間で埋められない差を工夫して翻訳することであり、「手話は日本語の意味表現である」という、音声日本語と手話との本質的な違いを体感できる有益な課題です。受講生それぞれ伝えたい内容は異なりますので、後期の授業の大部分は教室内で個別指導式の授業を行います。</p> <p>2. 前期に受講生から、「好きな歌を手話で表現したい」という希望が寄せられました。昨年度までは私から与えた「手話スピーチ」という課題を後期の中心としていましたが、今年度後期の授業は学生の自主性を尊重し、「手話スピーチ」または「手話歌」のどちらかを希望に応じて取り組んでもらいます。「手話歌」こそ「翻訳」の最たるものなので、異言語間の差を考察する良い課題だと考えています。</p>	